



若者のこととはで選民の抱い手になることと誓った（左から）林さん、康さん、江本さんのうしろ横断市・バルセロナが

わたしが架け橋に

県追悼式

震災14年

県内各地で11日、追悼行事が行われ、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の教訓や記憶をつないだ。福島市で行われた原子力の東日本大震災追悼復興祈念式では、国内外から参列した約3000人が犠牲者に鎮魂の祈りをささげ、吉里再生への決意を示した。

安積高生「伝える」覚悟



酒蔵代表の言葉を述べる
大竹さん（代表撮影）

殊事の爲に、福島の海岸で海外船客を接遇し、多くの船客の支えで生きながらす、たゞなくさるおもしろい食べ物がある、大好きな魚を知りたい。福島に恵みをください、いっしょに強くなりたい。

康吉は、カナダでホムステイを経験した、本業を被災支援でなく、魅力ある地域として見てくれホムステフとして、その交差を通して「海外の方々と直接対話すること、福島の復興を助けること、被災者を見て、支えること」を目標として、復興の現場、福島の現状を直接、見てみたいのではないかと感じた康吉さん。「震災を体験したことがない、現代化された時代の人々、現代化や記憶がない世代の人に、歴史を伝えてほしい」と次世代にエールを送った。

学びが生きる希望に

中から出てきた。大黒、最愛の夫と穏やかに時を刻み、大黒町はかけがえのない場所になった。調剤科の言葉も多々、同町の良人さん(因は「日本は大丈夫」と言っていた)と生きてきた主人に感謝してと、原務事故と主裁裁判で他界した夫(一さん)当時50へへの思いを口にした。

大竹さん(中国広東省出身。現地を黒川だった)さんとお出い。日本帰化。大黒町へ移住。一さん帰化した。共に暮らす日々をやり、20年を重ねた。その節目訪れたのは、避難先東芝の。

調査と原務事故を受け、大竹さんは自の白田を、さんのお姉を連れ、黒川、がんがん病していた。さんには病院に送迎車で遊戯、離れ離れにたつた。大変なことがあり過ぎて、それらがわからなかった。1

60歳の大竹さん「経験を子どもたちに」

一週間に再び会合したものの、
一人は病氣で変化と心算がた
病が急激に悪化、2001年
3月20日に帰国となった。
「今、一生懸命働いてゐた。今
当時は泣いてばかりだ。い
ふ議が必要な難題、難題を
とし、落ち着いた年は会談松
の校役住宅、周囲の中でそ
になったのは、苦悶の中で
国から届いた応援の手紙だ。
「感謝の紙を書いて送事
を出した」。謝辞先の同で
日本と大衆の中で職責を
で日本語の勉強を始めた。新
な学びは生きている希望になり、手
紙を通じた交流を生んだ。
23年春、大船司に戻った。今
も町の子どもたちと教養施設
「学び舎ゆめの森」に通う。「私
がたたいた心算の心算、業
業業の経験を手紙にわたる
の経験から、感謝の紙を
「学び舎」を深めたつもりだ。

記事から知り得たこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

調べてわかったこと、考えたこと (330 字程度)

みなさんなら全国に向けて、海外に向けて、
どんなメッセージを発信しますか。

